

森本孝さん

(漁村と漁民の社会文化研究者・編集者)

いま語り継ぎたい宮本民俗学の精神

日本中をくまなく歩いた民俗学者・宮本常一。その門下生の森本孝さんが子ども向けの伝記『宮本常一と民俗学』を上梓した。民衆の知恵を集め、地域振興にも尽力した宮本の生き方に、現代の子どもたちは何を発見するのだろうか。森本さんに話を聞いた。

「知のパイオニア」シリーズの一冊

——九月に『宮本常一と民俗学』が刊行されましたが、児童向けの本だと「気楽に手に取ったら、これまで知らなかった宮本常一の姿が次々と浮かび上がってきて、襟を正して読み直す羽目になりました(笑)」。どんな経緯でこの本を書くことになったのですか？

二〇一八年の九月に編集部から趣意書が送られてきて、「日本の伝記・知のパイオニア」という十二巻シリーズの一冊として執筆を依頼されました。寺田寅彦

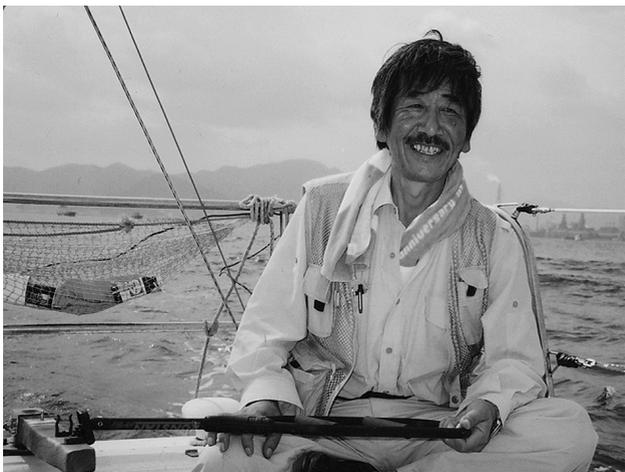
や岡倉天心、岡本太郎、今西錦司ら、学術や芸術の分野でパイオニア的な役割を果たした人物を取り上げる企画で、すでに被伝者は亡くなっているため、執筆者が本人に成り代わって自叙伝を書くというんです。

当初、とても無理だ、辞退しようと思いました。私はその二年前に末期の肺がんと診断されてさまざまな治療を試みてきましたが、ストレスはがんの大敵です。宮本先生の気持ちになって書くなどという文学的な想像力はとても持ち合わせていないので、執筆が大きなストレスとなって免疫力が低下してしまっ。しかし、原稿の執筆はストレスになるけれども、目的を持つこ

とは生きる活力にもなります。前向きな気持ちになってきたので、執筆を受諾しました。

弱者に手を差し伸べる姿を描きたい

——読み進むうちに、これは伝記というよりも若き宮



もりもと・たかし 1945年大分県生まれ。宮本常一が主宰する日本観光文化研究所で漁船や漁具の調査・収集を担当。機関誌『あるくみるきく』の編集・執筆も手がける。その後はJICAなどのプロジェクトで途上国の海洋民調査や水産技術支援に従事し、国立水産大学の教員や周防大島文化交流センター(宮本常一記念館)の参与も務めた。著書に『舟と港のある風景』など。

本常一の人間形成の物語だと思えてきました。最初からそういう方向で考えていたのですか？

宮本常一という民俗学者はどんな人か、その人物はどのようにして形成されたのか、その思想や哲学は何かを伝えたかった。現代の子どもたちはゲームに夢中で読書はおろそかになっていますが、宮本の人格を形成したのは読書でした。本が人間をつくり、君たちの人生を決めるんだというのもこの本のテーマです。

——故郷の周防大島^{すおう}を出て大阪で暮らし始めた頃の読書欲がすごいし、文学や思想など多方面に手を出して、食費も睡眠時間も削って本を読んでいる。若い頃の読書が人間を大きくすることがよくわかります。

それから、宮本常一は常に貧しい者、差別される側の立場に立とうとしてきたということですね。それこそ、私が宮本常一に惚れた原点ですから。

——クロポトキンを読み込んだり、左翼活動家を匿ったりしたこともあるというのも意外でした。

後に大蔵大臣を務める渋沢敬三の食客となったこともあって、宮本先生は政治的な意見を表明することは控えていたようですが、内に秘めた強い思いがあったと思います。貧しかった農漁村を歩き回るうちに、